

王治本の周防訪問および地元文人との文藝交流

柴 田 清 継
(武庫川女子大学文学部日本語日本文学科)

Wang Zhiben (王治本, 1835-1908)'s visits to the Suô area in the 18th and 19th years of Meiji (1885-86) and his literary exchange with the local literati

Kiyotsugu Shibata

Department of Japanese Language and Literature, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan

Abstract

Wang Zhiben, a Chinese poet who stayed in Japan in the Meiji era, visited the Suô area, the southeast of present Yamaguchi Prefecture, twice during his long journey around Western Japan for almost two years. In this paper I describe several significant aspects of his literary exchange with the local literati of Suô at that time, by examining the related materials I have compiled.

はじめに

王治本(号漆[泰]園, 1835 ~ 1908)は, 明治 18 年¹⁾7 月から 2 年近くに及ぶ西国大旅行の中で 2 度, 周防地方を訪れている。18 年と 19 年のいずれも秋冬である。本稿では『防長新聞』の記事や地元文人の詩文集, その他を資料として, それぞれの訪問時の地元文人との文藝交流の様相を描き出してみたいと思う。

I 明治 18 年の訪問

(1) 山口にて

18 年の秋を藝備地方で過ごした王治本²⁾は, 秋もかなり深まったころ, 周防山口を訪れていた。そのとき交流した相手は, 吉田松陰(1830 ~ 1859)の甥で, その後教育者として名を成す吉田庫三^{くらぞう}(1867 ~ 1922)である。彼の詩集『梅城遺稿』上巻³⁾所載の 18 年作と見られる「菜香亭席上王治本詩先成, 見示, 次礎却寄」詩二首の其の一に「節過重陽存晚菊, 秋深三径落衰葭[節 重陽を過ぎて 晩菊存し, 秋 三径に深く 衰葭落つ]」という 2 句のあることによって知られる。庫三は 15 歳の時に上京して二松学舎に入学, 2 年間漢学を学んだ。23 年, 22 歳の時に学習院で初めて教鞭を執ることになるが, それ以前, 17 年には山口に帰っていた模様である。菜香亭は 10 年ごろ創業の料亭である。当時僅か 18 歳の日本人の若者が 50 歳の清国人男性と料亭に行って, どんな時間を過ごしたのだろうかとも思われるが, それはともかく, 庫三にはもう一作, 王治本との交流の跡を示す詩がある。それを紹介しておこう。それは, 大内政弘(1446 ~ 1495)が雪舟(1420 ~ 1506)に命じて造らせたと言われる「雪舟庭」がその本堂の北にある潮音寺(現在は常栄寺)をとともに訪れて詠んだ詩である。

同清客王治本至潮音寺, 寺中卒賦

喬木参天翠映門, 高僧說法寺猶存。水光松影城東路, 來訪雪舟遺愛園。〔喬木 天に参じ 翠 門

に映ず。高僧 説法し 寺 猶お存す。水光 松影 城東の路、来訪す 雪舟 遺愛の園〕
池鱗逐隊自相親、山鳥去来与客馴。欲画不知身入画、潮音寺裏聴泉人。〔池鱗は隊を逐いて 自ら
相親しみ、山鳥は去来して 客と馴る。画かんと欲して 知らず 身の画に入るを。潮音寺裏 泉
を聴く人〕

(2) 柳井にて

18年の周防における資料のもう一つは、柳井市柳井津の「商家博物館 むろやの園」に保存されている長さ2間の書幅で、白楽天の「題洛中宅」詩の一句「春榭籠煙暖」と王治本自作の詩が書かれている。「むろやの園」は元禄初年創業の商家「室屋」の屋敷で、南北119m、面積2,561m²、建坪1,500m²で、「わが国に現存する町屋のなかでは最大のものといわれて」いる。また、「18室もある主屋をはじめとする屋敷内の建物は全部で11棟35室あり」、1979年に多くの生活用品や文書とともに山口県有形文化財に指定され、邸内は現在一般に公開されている⁴⁾。小田家の現在の当主、善一郎氏によれば、その広大な屋敷にはかつて多くの文人墨客が訪れ滞在したとのことであり、王治本に揮毫を頼んだ祖父の滴翠(名伴輔、1862?～1943)は、20代で衆議院議員になった人であるが、半面、遊芸にたけた人でもあったようである。

白楽天の詩は洛陽の大邸宅を詠んだものであり、王治本が揮毫したその中の1句は、その大邸宅内の春の霽の立ち込めた東屋の中が暖かいということを表現したものであるが、彼にとって小田邸はこの白詩のイメージと重なり合う場所だったのであろう。王治本自作の詩も、その識語とともに示すことにしよう。

画堂煙暖有常春、琴石山前風月新。坐対茶鑪歌一曲、此中間散半僊人。〔画堂 煙 暖かく常春有り、
琴石山(柳井にある山)前 風月新たなり。坐して茶鑪に対し 一曲を歌う、此の中 間散(ゆったりくつろいでいる)たり 半僊人〕 時在光緒乙酉仲冬 小田滴翠君属 瀨東王治本

これは、言うならば、白詩のイメージを下敷きにしつつ、小田邸で過ごしている自らの、たいそうのんびりとした心境と重ね合わせて表現し直したものである。光緒乙酉仲冬は明治18年12月6日から19年1月4日までの間に当たる⁵⁾。

さて、現在判明しているところでは、王治本は19年の4月中旬ごろ高知を訪れ、2ヶ月ほど滞在したのである⁶⁾が、19年の1～3月ごろはどこにいたのか、今のところ不明である。引き続き周防内に滞在もしくは漫遊していたことも考えられるが、関係資料未発見のため、確認できないのが現状である。一方、高知を去った後の王治本は、この年の中秋(陽暦9月12日)を松山で迎え、その後再び周防を訪れた。19年秋冬の周防訪問について、次節で述べることにする。

Ⅱ 明治19年の訪問

当時、松山の三津浜と防府の三田尻との間には毎日、船の定期便があった⁷⁾から、王治本がまずは防府に滞在したのは、極めて自然なことであつたろう。そして次に彼は山口へと赴く。本節では、現在防府市に属する地域と山口市に属する地域とに分け、王治本が行った文藝交流の跡をそれぞれのどってみることにしよう。

(1) 防府にて

『防長新聞』19年10月2日に「雅客応酬」と題して、9月26日、佐波郡右田村で土肥実香(号螺峰、1835～1899)と佐久間清緒が会主となり、宮市町の藤井和兵衛方に滞泊している王治本を招待して、同村の西雲寺(現在は徳性寺と称されている)で設けた、書画会の事が報じられている。「同日会する者近傍の諸先生を始め無慮三十有餘名あり頗る盛会にして席上土肥、王両先生応酬の句あり」として、七絶二首が紹介されている。そのうち、土肥螺峰の作は、

邂逅相逢齡亦同、一談一笑吐真衷。大兒索菓小兒乳、不似君家双碧桐。〔邂逅して 相逢い 齡も

亦同じ。一談一笑 真衷を吐く。大児は菓を索め 小児は乳。似ず 君が家の 双碧桐(二人の素晴らしい息子さん)に]

というもので、自分の二人の息子がまだ幼く、王治本の二人の息子に及ばないことを述べているが、詩の後に「先生曰、余有二子、入於東京某校、⁸⁾亦有兩兄、故及之」との説明が付け加えられている。この説明によれば、王治本にはこの当時、東京の学校に通う二人の息子があったことになる。一方、王治本の作は、

文同況復齒相同、酔裡高談見寸衷。雛鳳声清於老鳳、双々飛上碧梧桐。〔文同じ 況や復た 齒相同じきをや。酔裡 高談 寸衷を見す。雛鳳(才能のある若者)は声 老鳳より清し。双々 飛び上がる 碧梧桐に]

というもので、子供の将来性へと内容を転じるとともに、螺峰との同文同年の間柄にも触れて、親しみを示している。

螺峰は「廢藩の際一時学校訓導たりしが後に義塾を設けて後進を導き更に山口中学校教諭周陽学舎長等に歴任し身教育に在勤する前後数十年薫陶の功多」⁹⁾かった人で、その遺著『螺峰遺稿』¹⁰⁾にも王治本との交流の跡を示す作品が掲載されている。次にそちらに目を転じることにしよう。なお、佐久間清緒については未詳である。

『螺峰遺鈔』に窺うことのできる王治本との交流の跡は、まず、防府か若しくはその近辺にある「双泉」という所へ出かけた時の次の一首である。

一日与今川岳南・長松掬翠諸子誘王泰園遊双泉、賦以眎泰園(王泰園来遊盖十九年也)

雖無千仞凌空勢、有松蓊鬱陰可蔽。其間怪巖左右懸双泉、水雖不多清且涓。洗心崖前半椽屋、聊以相坐張清筵。時非寒夜茶当酒、汲水烹泉有山叟。先生胸次若江湖、不尤薄物情却厚。先生笑語入興深、劈箋援筆發高吟。先生高懷清如水、使人一洗鄙吝心。〔千仞 空を凌ぐの勢い無しと雖も、松の蓊鬱なる有り 陰 蔽う可し。其の間 怪巖 左右に双泉懸かり、水 多からずと雖も 清くして且つ涓たり。洗心崖前 半椽の屋、聊か以て相坐し清筵を張る。時に寒夜に非ず 茶をば酒に当て、水を汲み泉を烹るに山叟有り。先生は胸次(胸の中) 江湖の若く、薄物を尤めず 情 却って厚し。先生は 笑語 興に入ること深く、箋を劈き筆を援りて高吟を發す。先生は 高懷 清きこと水の如く、人をして鄙吝の心を一洗せしむ]

今川岳南(1827? ~ 1896)は、名は吉利、岳南はその号。右田の人で、「維新後学制頒布ありて明治六年右田小学校教師となり二十九年辭職してその十月十七日歿、年六十九。また詩書を能く」¹¹⁾したという。長松掬翠については未詳である。

次は「寄王泰園」と題する作で、上引の王詩同様、同文同年の親しみにも触れている。

東海遙從奉使臣、衣冠當日傍風塵。敲金擊石詩餘韻、臥虎騰竜筆入神。駢路仰瞻富嶽雪、旅窓歸夢洞庭春。十年游跡臨寒境、幸結同文同齒親。〔東海 遙かに奉使に従う臣、衣冠 當日 風塵に傍えり。金を敲き石を撃ちて 詩 韻を餘し、臥虎騰竜 筆 神に入る。駢路 仰ぎ瞻る 富嶽の雪、旅窓 歸夢 洞庭の春。十年の游跡 寒境に臨み、幸いにも結ぶ 同文同齒の親〕※第2句の後に「泰園明治八年来東京入公使館為属吏、故云」との自注がある。

ところで、王治本は10月18日には山口へ赴くことになっていたようで、次に掲げるのは、その前日に筆屋楼なる料亭で催された送別会での作である。

十月十七日夜与吉田恕菴翁及村上・大田・佐久間・川辺諸子邀王泰園干筆屋楼而飲、泰園將以明朝赴山口、席上賦之

紅燭高烧欲雨時、筆屋楼頭筯酒卮。流水潜声山匿影、猶助吾儂送別悲。殺雖不佳如丘嶽、酒雖不美如淮泗。玉織女子須作画、泰園先生須賦詩。此殺此酒真風味、唯有賓主寸衷知。〔紅燭 高く焼ゆ 雨ふらんと欲する時、筆屋楼頭 酒卮を筯ぐ。流水は声を潜ませ 山は影を匿し、猶お助く 吾儂が送別の悲しみを。殺は佳からずと雖も 丘嶽の如く、酒は美からずと雖も 淮泗(中国の淮水と泗水)の如し。玉織女子は須く画を作るべく、泰園先生は須く詩を賦すべし。此の殺 此の酒こそ 眞の風味、唯賓主の 寸衷を知る有らんのみ]

やや稚拙な感じのする作品であるが、それはともかく、詩中に見える玉織女子(史)は王治本が16年以来道連れにしていた加賀出身の日本人女流画家横井(もしくは野(埜)田)玉織のことで、年齢はこの当時30歳くらいであったと考えられる¹²⁾。この送別会に出席した日本人のうち、村上・大田・佐久間(清緒か?)・川辺については未詳であるが、王・土肥の兩人よりも17歳も年長の吉田恕菴(1818?～1901)は、『恕庵詩文集』¹³⁾の「例言」(河辺寛之助執筆)によれば、「夙に長藩公族、海北毛利氏に仕えて、其の邑宰と為り、奥羽に于役(使い)し、京摂に往来し、明治維新の後、群馬熊谷¹⁴⁾二県に奉職」した人で、晩年は「佐波郡右田村」に住んでいたようである¹⁵⁾。『疑問録山陽先生垂誨』、『上野国地誌概略』¹⁶⁾等、その編著書は少なくない¹⁷⁾。

さて、土肥螺峰と王治本との交流の跡として取り上げるべき最後の作は、次の一首である。

訪黍園旅寓、此日雨甚、故阻山口行、黍園饗酒、寓主召妓、戲賦一絶

松月軒中挙別杯、明宵望月独徘徊。豈図三疊陽関曲、乍入三絃声裏来。〔松月軒中 別杯を挙ぐ。明宵は 望まん 月の 独り徘徊するを。豈図らんや 三疊 陽関の曲、乍ち三絃声裏に入り来らんとは〕

詩題と詩句から分かるように、10月18日に予定していた王治本の山口行きが雨のため延期になり、彼の宿泊先松月軒で送別会のやり直しとなったのである。

ここでまた吉田恕菴に話が戻るが、彼の『恕庵詩文集』に収められた「辞職帰郷」後の作の後半のものに対しては、王治本の評が付されており、巻末には「披誦一過、機局高渾、手法円熟、不屑作塗粉敷脂、尤見識力〔披き誦むこと一過、機局高渾(構えがひとときわ重厚)にして、手法円熟し、塗粉敷脂(表面を飾りたてること)を作すを屑しとせず、尤も識力を見る〕。 丙戌孟冬月 澗東黍園王治本拜識」との識語もある¹⁸⁾。

『防長新聞』19年10月20日には「清客謁菅廟の詩」と題して、王治本が松崎天満宮へ奉納した「長古一章」が紹介されている。太宰府へ流されていく途中、松崎に宿泊したという伝説のある菅原道真の事を詠んだ、次のような作品である。

吁嗟乎謂公不逢時何以明揚作帝師、謂公得逢時何以垂老謫海陲。道長道消一反手、時也命也不可知。緬想公自寛平初、超擢翰院登鼎司。濟世經綸邁管樂、匡時事業擬臯伊。猷可替否尊王室、威權未許戚臣移。相慶明良纔十載、天皇荒勁起退思。君臣之遇不終合、纔毀之言從此滋。慷慨避位三上表、從容諫獵一二詞。鄙哉博士生妄議、漫云明哲見機遲。公以此身作砥柱、一去一留盛盛衰。唯願尽瘁學諸葛、不願避禍効范蠡。海西之行亦夙料、臣罪當誅復何辭。幽廬相對唯書卷、荒徑栽植有梅枝。每日焚香拜恩賜、愁逢佳節賦新詩。悠々謫居過三載、樞星夜隕筑水湄。嘆息一蹶不復起、道之窮也命為之。聞説當年西遷過此地、三尺坐右尚留遺。建議於朝始立廟、追懷旧蹟復樹碑。人民葉世肅瞻拜、歲時祈報薦明粢。酒垂山高佐川遠、与公德沢並遐施。吁嗟乎公之遇而不遇者、力不能以破群疑。公之不伸而伸者、道直將以万古期。吾嘗讀史至昌泰延喜間、不能不為公掩卷而噫噫。〔ああ 公時に逢わざりしと謂わんか、何を以てか明揚せられて帝師と作れる。公 時に逢うを得たりと謂わんか、何を以てか老に垂んとして海陲に謫せられたる。道の長ずると道の消するは 一たび手を反し、時なりや命なりや 知る可からず。緬想す 公 寛平の初めより、翰院に超擢せられ 鼎司に登る。世を濟う經綸は 管樂(管仲と樂毅)に邁り、時を匡す事業は臯伊(臯陶と伊尹)に擬す。可を猷じ否に替えて 王室を尊び、威權 未だ許さず 戚臣の移すを。明良を相慶ぶこと 纔かに十載、天皇 荒勁 退思を起こす。君臣の遇 終に合わず、纔毀の言 此れより滋し。慷慨して位を避り 三たび表を上り、從容として獵を諫む 一二の詞。鄙しきかな 博士 妄議を生ず。云う漫かれ 明哲は 機を見ること遅しと。公 此の身を以て 砥柱と作し、一去一留 盛衰を感う。唯願わくは 尽瘁 諸葛(諸葛亮)に學ばん。願わず 禍を避くこと 范蠡に効わんを。海西の行も亦夙に料れり。臣の罪は誅に当たる 復た何ぞ辞せん。幽廬 相對するは 唯書卷のみ、荒徑 栽植して 梅枝有り。毎日 香を焚きて 恩賜を拝し、愁い 佳節に逢えば 新詩を賦す。悠々たる謫居 三載を過ぎ、樞星 夜 隕つ 筑水の湄。嘆息す 一たび蹶きて 復たは起たず、道の窮せるや 命之を為せり。聞説ならく當年 西遷 此の地(松崎)を過ぎ、三尺の坐右 尚お留遺せり。朝に建議

して 始めて廟を立て、旧蹟を追懷して 復た碑を樹つ。人民葉世 肅として瞻拝し、歳時 祈報して 明燦を薦む。酒垂山(天満宮のある天神山)は高くして 佐川(佐波川)は遠し。公と徳沢 並びに遇く施さる。ああ公の遇いて遇わざるは、力 以て群疑を破る能わざればなり。公の伸びずして伸ぶるは、道の直きこと 将に万古を以て期せんとすればなり。吾嘗て史を読みて 昌泰延喜の間に至り、公の為に巻を掩いて噫噫たらざる能わず]

この作品は高知の詩人三浦一竿(1834～1900)の『江漁晩唱集』にも「謁防府菅右相廟謹賦」と題して、全くの同文が掲載され、かつ「光緒丙戌重九日拝謁防府／菅右相廟得觀旧藏詩冊、謹賦長古一章／聊以抒仰慕之忱 瀨東王治本拜稿」との識語も付載されている¹⁹⁾。その中の日付により、この奉納詩の作成は陽暦の10月6日であったことが知られる。『江漁晩唱集』には山田天籟²⁰⁾の「(前略)先生以海外游客能諳悉延喜時、事切真發、尤為難得(後略)〔先生は海外の游客を以て能く延喜の時を諳悉せり、事切にして真發するを、尤も得難しと為す〕」との頭評も付されているが、全く同感と言うほかはない。識語には「防府の菅右相の廟に拝謁した際に、旧藏の詩冊(『菅家文草』『菅家後集』か)を見ることができた」ことが詩を賦した動機のように書かれているが、実際は平素から日本の歴史に関心を寄せ、相当深い知識を蓄えていたものと見て間違いあるまい。

さて、19年の1月25日には右田と小鯖とを結ぶ鯖山(佐波山)洞道が竣工していた²¹⁾が、『防長新聞』同年10月30日には「清客の二絶」と題して、彼の「鯖山洞道乃口占二絶」が「読者の瀏覽に供」されている。

鑿破雲崖隧道寬、洞嶺殘石似刀攢。霎時穿過佐波嶺、不復当年行路難。〔雲崖を鑿破して 隧道寬く、洞嶺の殘石 刀もて攢てるに似たり。霎時 佐波の嶺を穿ち過し、復たは当年のごと行路難からず〕／百尺危巖誰劈開、仙原有路任人來。為愁洞裏天昏黑、幾盞明燈照鏡台。〔百尺の危巖 誰か劈き開ける。仙原 路有り 人の來るに任す。洞裏 天 昏黒なるを愁うるが為に、幾盞の明燈 鏡台を照らす〕

(2) 山口にて

前述の通り、王治本は10月19日以後には山口へ移ったと考えられるが、『防長新聞』19年11月9日は「探韻雅会」と題し、11月6日に「博物標本製造所の日野恕介翁が会主となり井上、上領、伊藤、岡村、新山、馬島等の諸先生方と共に清客王漆園氏を大殿大路の朧菴に請して探韻の雅会を開かれた」ことを報じ、その時の王治本の「小春小集 分得東韻」と題する七絶二首を紹介している。ただ、第一首は、印刷ミスか、結句の韻が合わない。杜甫の「漏洩春光」(「臘日」詩)の典故を用いた第二首のみ挙げることにする。

夕陽影淡暮山空、絶好詩情半醉中。漏洩春光曾有信、梅花数点小墻東。〔夕陽 影淡くして暮山空なり、絶好の詩情 半酔の中。春光を漏洩して 曾て信有り、梅花数点 小墻の東〕

日野恕介(1827～1909)は医師、本草学者で、改名前の宗春を以て称されることが多い。孫の日野巖著『日野宗春』によれば、「(宗春は)明治十九年一月八日に願によつて山口県御用掛を免ぜられてからは、山口駆働所、済生会山口支会産婆養成所などに勤め、傍ら防長女子教育協会理事をも勤めた」。また、「詩文の号は鷗洲、白鷗、沙鷗などといい、また、茶を好んだので茶翁、茶禪、茶狸々などとも号した」²²⁾。

さて、この「雅会」に参加した人々のうち、日野恕介以外は、姓しか記されていないため、特定は難しいが、同定できる可能性のある人物を挙げてみることにする。上領は上領頼軌(1825?～1895)か。『増補近世防長人名辞典』に「乾堂と号す(中略)最も詩文を能くし嚶鳴社員たり、遺稿若干あり、(中略)維新後浜田藩に出仕しのち東京に移り明治二十八年十月廿一日歿、年七十」とある。岡村は岡村圭三(1845?～1910)か。『増補近世防長人名辞典』に「黒城または筌斎と号す(中略)維新の後父を助けて敬止塾を經營せしが学制頒布の際山口第一小学校長となり、尋いで家塾をこの地黒谷に創立し黒城塾と名づく、子弟の入って学ぶ者前後数千に及ぶ、その間また書道を山口師範学校に授く」とある。新山は新山忠(1823?～1896)か。『増補近世防長人名辞典』に「球湖また楽山と号す、萩藩士なり(中略)維新後家に教授し、また山口師範学校教諭となる、明治廿九年三月十六日歿、年七十三。遺著に乾島略志あり」とある。馬島は馬島春海(1839?～1905)か。『増補近世防長人名辞典』に「名は春海、北溟と号す、(中略)維新後

山口県に出仕せしが、のち退いて萩に帰り子弟に教授し誘掖才器を成すもの多し、晩に東京に移居し明治三十八年十一月十六日歿す、年六十六」とある²³⁾。井上と伊藤については未詳。

『防長新聞』19年11月12日には「又た詩」と題して、記者が入手した王治本の七律二首が「読者の瀏覧に供」されている。彼が雪舟(1420～1506)の旧居跡雲谷庵に遊んだ時の作である。

游雲谷庵

游到雪師旧法筵，荒林賸得屋三椽。維摩戲作丹青筆，好事追尋翰墨緣。花落山空人寂々，雲迷谷閑水涓々。他年我返四明棹²⁴⁾，欲向天童問老禪。〔遊び到る 雪師の旧法筵。荒林 賸し得たり 屋三椽。維摩(維摩詰。雪舟を喩えた)戯れに作す 丹青の筆，好事追ひ尋ぬ 翰墨の縁。花落ち 山空しくして 人寂々たり，雲迷い 谷閑かにして 水涓々たり。他年 我 四明に棹を返しなば，天童に老禪を問わんと欲す〕 雪師曾入天童寺為僧

王治本自身の付記にもある通り、雪舟は中年になってから明に渡り、寧波の古刹、天童山景德禪寺で「四明天童山第一座」という高位の称号を受け、その後このことを誇りとしていた。この詩の尾聯はその故事を踏まえ、四明がたまたま王治本の古里でもあることから詠出されたものである。

もう一首は大安楼の酒席での作である。

大安楼酒間分得江韻

短筇一一屐双々，快上旗亭倒玉缸。写此胸懷憑醉筆，知農抑鬱有吟缸。高情擬托先生柳，雅鑒元推居士龐。黃菊花前聊倚檻，数声驚聽莫鐘撞。〔短筇(短い杖)は一一 屐は双々，快く旗亭に上り 玉缸(徳利)を倒にす。此の胸懷を写くは 醉筆に憑り，農が抑鬱を知るは 吟缸(ともしび)有ればなり。高情は 托せんと擬す 先生柳(陶淵明)，雅鑒は 元推す 居士龐(唐代の仏教者龐居士)。黃菊花前 聊か檻に倚り，数声 驚きて聴く 莫鐘(晩鐘)の撞かるを〕

ところで、上述の日野家に残っていた王治本の書や詩文などは、その後山口県立文書館(現山口県文書館)に寄贈された²⁵⁾。現在、同館所蔵の文書に王治本関係のものが3点確認できる。そのうちの一つ、請求番号「日野家 144」の文書は、維新後山口県庁のものとなっていた陳元賛(1587～1671)自筆の萩藩伝来『長門国志』を王治本が借覧し、二絶句を題したものである²⁶⁾。『近世 防長人名辞典』によれば、「陳元賛は明末余杭の生なり、万暦中国乱を避けて本邦に帰化し、元和七年長州侯毛利輝元に依って萩に來り、居ること歳余『長門国誌』一卷を編して献ず時に元和九年なり、その稿本現存す(後略)」²⁷⁾とあり、その「現存」している「稿本」がほかでもなく王治本が借覧したものである。王治本が書きつけた文句は、さねとう氏がすでに初めの絶句のみ紹介してくださっている²⁸⁾が、ここではあらためてその全体を紹介することにしよう。初めの絶句にはさねとう氏の訓読を、後のそれには筆者の訓読を付することにする。

題陳元賛長門国志後

喜是同文氣誼連，載将游筆紀山川。脩成一卷長州志，伝到于今三百年。〔喜ばしきは是れ同文氣誼連ること，游筆を載せ将て 山川を紀す。脩成一卷の 長州志，伝えて今に到ること 三百年〕／感彼萍踪知遇奇，為揚徳沢表威儀。姚江亦有文章在，無此称堯頌舜詞。〔感ず 彼の萍踪 知遇奇なるは，徳沢を揚げ威儀を表すが為なるに。姚江にも亦 文章の在る有り，此き称堯頌舜の詞は無けれども〕 光緒丙戌孟冬月游次鴻城。此志蔵山口県庁，乞得借閱一過，為題二絶以還之。瀨東王治本 ※第二首第四句の後に「姚江朱舜水也」との自注がある。

この二首を通して王治本が言わんとする所は難解であるが、筆者は次のように解釈する。第一首は陳元賛が長門、ひいては日本の人々と「同文」のおかげで、気持ちが通じ合い、藩内の各地を取材して回って書き上げた『長門国志』を、完成後 300 年(実際は 263 年)の時を隔てて目の当たりにした感動である。第二首は、表面上の意味は〈余杭出身の陳元賛は、日本で放浪の後半生を送ることになったにもかかわらず、日本の人々から手厚い知遇を受けた。それは彼が徳沢を揚げ威儀を表したからであり、そのことに感動を覚える。陳元賛に対するほどの絶賛の言葉は見られぬものの、姚江出身の朱舜水にも実はそれなりの才能や学問はあるのですぞ〉というようなことかと考えられる。一般的な知名度から言えば、朱舜水が陳元賛に劣るはずはないにもかかわらず、このような表現がなされたのはなぜか。作者自ら、姚

江は朱舜水(1600～1682)なりとの注を付している点が重要であろう。というのは、余杭、姚江のいずれも浙江省に属するとはいうものの、姚江は王治本の出身地慈溪と地理的に重なり合い、したがって彼は朱舜水の名を借りて自らを語っていると見られるからである。すなわち、自分も今後とも日本国内を經巡り、ぜひ陳元賛並みに日本の文化に対する貢献を成し遂げたいという気持ちを表明しているのである。

山口関係の資料の締めくくりは、再び土肥螺峰の詩に戻る。螺峰はいったん防府で王治本と別れた後、山口に出てきて再会を果たしている。その時の詩二首が『螺峰遺鈔』に載っている。

在山口与王泰園飲

錦水橋頭訣飲時、今宵再会不相期。果然万事塞翁馬、何憾人間生別離。〔錦水橋頭にて 訣飲せし時、今宵の再会 相期せざりき。果然 万事 塞翁が馬、何ぞ憾まん 人間の生別離〕／樓頭喚酒酒來遲、幾度開窓立索詩。八坂祠前半宵月、閑情唯有兩人知。〔樓頭 酒を喚ぶも酒の來ること遅く、幾度か窓を開き 立ちながら詩を索めたる。八坂祠(大内弘世が京都から勸請した八坂神社)前 半宵の月、閑情は 唯兩人の知る有らんのみ〕

山口を去った王治本は翌 20 年丁亥の元旦を長門の下関で迎え、丁亥の 2 字を各句の初めに付けた次のような詩を日野宗春へ郵送した。

丁簾飄動曉風輕、亥雪初収又轉晴。丁日応脩尼父奠、亥年曾說絳僊生。丁香宝結聯華勝、亥既明珠照寿觥。丁卯集中新得句、亥章歩裏遠游程。

これは山口県文書館請求番号「日野家 59」の文書中に見えるもので²⁹⁾、その識語には「杏村君春海君望代道 禧／附頓野少府賀詩乞転呈為荷」とも記されている。杏村は当時山口始審裁判所長の任にあった古莊一雄(1848～1931)の号。頓野^{とみの}は山口県書記官の頓野馬彦。王治本は山口滞在時、これらの人物とも何らかの交流のあったことが知られる³⁰⁾。

おわりに

以上、明治 18 年と 19 年の二度にわたる王治本の周防訪問とその間に行われた地元文人との詩文交流の様子を紹介した。

次稿では、20 年前半の筑前・筑後・肥後・豊前(耶馬溪)・讃岐(寒霞溪)訪問を取り上げ、今回と同様、地元文人との詩文交流の跡を追ってみたい。

注

- 1) 以下、本稿の本文では見出し等、一部の箇所を除き、「明治」の年号は省略することにする。
- 2) 拙稿「王治本の藝備訪問および地元文人との文藝交流」(『武庫川国文』第 77 号、2012 年)。
- 3) 子弟有志者編『梅城遺稿』(1929 年 4 月)上巻(吉田庫三先生著 詩)。
- 4) 「商家博物館 むろやの園」パンフレットによる。
- 5) むろやの園所蔵の王治本の書幅の存在は山口文書館副館長金谷匡人氏のご教示により知った。また、その実地調査に当たっては小田善一郎氏のお世話になった。なお、小田家については『山口県文書館諸家文書目録 1 柳井市金屋小田家文書 第一分冊』(山口県文書館、1994 年)の「解説(その一)」に詳しい。
- 6) 柴田清継・蔭海波「明治期高知における日中文人の交流－旅の詩人王治本を中心として－」(『日本語日本文学論叢』第 7 号、2012 年)。
- 7) 例えば河崎源太郎編『山口県豪商早見便覧』(明治 19 年 8 月、『明治期山口県商工図録』に収録、マツノ書店、1993 年)「大坂商船会社三田尻出張店」の項。
- 8) 按ずるに「亦」字の前に、一人称を表す「余」等の字を脱していると思われる。
- 9) 吉田祥朔『増補 近世防長人名辞典』(マツノ書店、1976 年) p.165。
- 10) 安部民治編輯兼発行『螺峰遺鈔』、明治 43 年。

- 11) 『増補 近世防長人名辞典』p.39-40.
- 12) 玉織女史について詳しくは拙稿「王治本 越佐の旅およびその間の詩文交流—明治十六、七年を中心として」(『新潟県文人研究』第15号, 2012年)で取り上げた.
- 13) 吉田恕庵著・河辺寛之助編『恕庵詩文集』(河辺寛之助, 明治24年).
- 14) 熊谷県は現在の埼玉県と、群馬県のほぼ全域に当たる. 明治6～9年の間存在.
- 15) 吉田恕庵『天野氏譜録』(明治24年)奥付記載の住所による.
- 16) 『疑問録山陽先生垂誨』(博文堂, 明治9年), 『上野国地誌概略』(誠之堂, 明治10年).
- 17) 吉田恕庵については『増補 近世防長人名辞典』p.270も参照.
- 18) 丙戌孟冬は陽暦の明治19年10月27日から11月25日に当たり, その頃には王治本は既に山口へ移動していたはずである. 執筆月の記載はさほど正確を期するものではなかったのかもしれない.
- 19) 三浦漁『江漁晩唱集』(三浦万里, 明治42年)附録29丁オ～30丁オ.
- 20) 山田天籟(1863～?)は、『百花欄』11集(明治36年)の「作家姓氏」欄によれば, 本名は重光, 字は儀卿または伯敬, 東京の人.
- 21) 『防長新聞』明治19年2月1日「雑報」.
- 22) 日野巖著『日野宗春』(日野稔彦, 1958年)p.2,4.
- 23) それぞれ『増補 近世防長人名辞典』p.82,75,186,222.
- 24) この「棹」字は「棹」の誤りではないかと疑われる. 「棹」に改めて訓むことにする.
- 25) さねとうけいしゅう「王治本の日本漫遊」(同氏『近代日中交渉史話』, 春秋社, 1973年)p.188.
- 26) 王治本が文字を題した部分は, その写真が小松原壽『陳元賛の研究』(雄山閣, 1972年)p.276に掲載されている.
- 27) 『増補 近世防長人名辞典』p.158.
- 28) さねとう「王治本の日本漫遊」p.189.
- 29) 山口県文書館所蔵の王治本関係の文書にはもう一つ, 佐渡の竹田村で日野重相を弔って書いた詩を日野宗春の嘱により揮毫したものがある(請求番号「日野家24」)が, 防長の日野家と日野重相, すなわち日野邦光(1320～1363?)との関係等が依然不明であるため, 本稿では取り上げない. 拙稿「王治本 越佐の旅およびその間の詩文交流—明治十六、七年を中心として」(注12)で詩句を紹介し, 言及した.
- 30) この詩は実は『高知日報』明治20年1月8日の「雑録」にも「陽暦丁亥元旦毎句戯用丁亥字冠首賦成小詩, 郵賀高城相知諸翁先生新禧 泰園王治本初稿 時游次馬関」として載っている. 明治19年の前半の2ヶ月を過ごした高知の文人たちへの賀詩としても使われたわけである.